

子育て支援講座における音楽遊びの実践

Practice of Music Activity in Child Rearing Support

中村礼香・丸田愛子

Ayaka Nakamura, Aiko Maruta

鹿児島女子短期大学

抄録：本研究は、音楽遊びの内容が保護者のニーズに合っているか質問紙調査を通して検証し、内容を精査することを目的として行った。その結果、自宅でもできるような歌唱活動やわらべうた遊びよりも、周りを気にせずに音を出せたり動くことができたりする、打楽器遊びやリトミックなど活動的な遊びが求められていることがわかった。また親子での触れ合い活動を強く望まれていることがわかった。この結論は現在行っている子育て支援講座の内容と一致している。そこで、今後は内容の更なる発展を図るため保育者養成校ならではの活動を取り入れたいと考えている。来年度からは学生のアクティブ・ラーニングの一環として、保育技術の向上を目的とし、講座に学生を主体的に参加させる予定である。この取り組みへの教員のアプローチや学生の成長過程を今後の研究課題としたい。

Key words：子育て支援講座、音楽遊び、保護者のニーズ

1. はじめに

本研究は、平成26年度より継続している鹿児島県における子育て支援に関する研究である。これまでに実施した子育て家庭を対象とした子育て支援講座のニーズ調査では、親子参加型の触れ合い遊びのニーズが高いことが分かった。これらの結果を踏まえ、筆者である中村と丸田はそれぞれ親子参加型の講座を計画し、その実際を明らかにすることに取り組んだ。中村の音楽講座では、リトミックが受け入れられやすいことが分かった。丸田の触れ合い遊び講座では、親子の双方向のかかわりが生まれやすく、親子を支援する活動としての可能性が示された。これらの結果は、今後の講座の実施にあたり、大いに活用できると考えられる。一方で、これまでに実施した音楽講座と触れ合い遊び講座は、筆者らが考えた内容である。今後講座を継続するにあたり、実際に受講者が望んでいる内容を踏まえる必要性を考えるようになった。更なる活動の展開を期待し、子育て家庭が希望する音楽を通した子育て講座の実践について明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 子育て支援と音楽

子どもは音楽を意識的に教えたわけではなくとも、自然と歌ったり、物を叩いてリズムを取ったり、全身を動かして音楽に合わせて踊ったり、様々な方法で音楽を楽しみ表

現する。梅本（1999）は「音楽は子どもにとって、遊びの一種である。年齢の低い子どもにとってどんな音が出るのかとか、高い音、低い音、明るい音色、暗い音色と変わったりすることが興味深いのである。一中略一子どもにとって歌うことは音声の遊びであり、大人と違って遊びが生活の中心となっている子どもにとっては、歌うことも、音も鳴らすことも、生活にとって、また成長にとって必要不可欠の精神的栄養となっている。」¹⁾と述べている。このように子どもと音楽の関わりは切っても切れないものである。子どもから切り離すことのできない音楽を親子で楽しむ意義はどのようなものであろうか。

石川・大沼（2009）は子育て支援において音楽活動を行うことで、「声や音でやりとりしたり、リズムや動きをとともに感じたりすることが、養育者と子どものかかわりを育む上で有効であることが示唆された。」²⁾と述べている。

志村（1996）は親が子どもに歌い聞かせることについて、「正しいメロディやリズムでなくても、たとえじょうずに歌えなくても、親が歌ってくれることにまさるものはないのです。多少はずれたメロディでも、子どもといっしょになって歌ったり、めちゃくちゃなダンスを踊ったりして楽しむことで、子どもは、『音楽って楽しい』『歌って面白い』と肌で感じるができます。こうした音楽を通しての何気ない親子の触れあいによって、子どもの情緒も豊かになり、

親と子の絆も深まってきます。』³⁾と述べている。

また、ウィリアム・カークパトリック (1965) は5歳児100人以上について調査し、子どもたちの歌う能力と家庭環境の間に強い関連があることを見出した。親が子どもに歌いかけたり、親が子どもと一緒に歌ったり、両親以外の大人からの音楽的な援助があったり、また家族ぐるみで歌ったり演奏したり、音楽的な経歴を持つ親がいることなどの、音楽的環境が整っている家庭であればあるほど子どもが正確な音程で歌うことができたという結果が導かれた。

このように、音楽活動を親子で行うことは親子のかかわりを深めるだけではなく、子どもの情緒を豊かにし、音楽的な能力を高めるきっかけを作ることができる。現在、中村の2年生前期の音楽の授業では、簡易楽器奏法やわらべうた、幼児との歌唱活動など現場で必要な音楽活動全般について教授している。その中で、中村が保育現場で音楽活動をしている映像を見せるだけでなく、子育て支援講座における親子での音楽活動の様子も見せるようにしている。学生たちが将来、現場で子育て支援として音楽活動を使うことはないかもしれないが、保育参観などで親子の触れ合いを行うことはあるだろう。そこで、なぜ親子で音楽活動を行うことが良いことなのかを授業を通して伝え、保育指導案を作成する際の引き出しの一つとなればと考えている。

3. 質問紙調査概要

3-1 調査方法

中村は平成28年度に3カ所でそれぞれ1回ずつ音楽の子育て支援講座を行った。中村が講師を務めた3件の子育て支援講座参加の保護者を対象とし、講座終了後に質問紙調査を行った。20代から40代の参加保護者103名中、97名(回収率約94.2%)からの回答が得られた。保護者らには研究として質問紙調査の結果を使用することの同意は得ている。

3-2 調査内容

質問は大きく3つに分けた。

- (1) 受講した活動内容の満足度についての質問
- (2) 今後受講する場合、音楽遊びとして希望する内容についての質問
- (3) 音楽を通した子育て支援講座に希望する内容についての質問

全ての質問を5段階で丸を付けて回答できるようにした。詳細については調査結果にて述べていく。

3-3 調査結果及び考察

アンケートの回答を得られた親子は97組(保護者97名子ども105名)である。保護者の年代の分布は20代13名(13.4%)、30代66名(68.0%)、40代18名(18.6%)であった。一方子どもは1歳から6歳までが参加しており、最も多いのが2歳児56名(53.3%)、次いで3歳児27名(25.7%)で、2,3歳児がほぼ8割を占めていた(表1)。

次よりアンケートの結果について詳しく述べていく。

(1) 受講した活動内容の満足度について

平成28年度の子育て支援講座の基本的な流れは全て同じとなるように企画した。リトミック活動、わらべうた遊び、歌唱活動、打楽器遊びの4種類を取り入れ、年齢に応じて構成した。講座の内容の一例を下に示す。

講座はまず導入として「パンダ・うさぎ・コアラ」を子どもたちと一緒に行う。そしてリトミック活動に入る。「さんぽ」の曲に合わせて歩く、音が止まったら動きを止めるということをくり返した後、高い音が聞こえたら保護者がたかいたかい、もしくは抱っこをする、低い音が聞こえたら座る、音楽が止まったときに「おでこ」と聞こえたら親子でおでこを合わせるなど、様々な指示を組み合わせた。その後ボールを子ども一人につき一つ配り、音楽に合わせて親子でボールを転がし合ったり、保護者がボールで拍に合わせて子どもの身体中をトントンと叩いたりした。また、複数の親子で円を作り、「夢をかなえてドラえもん」の曲に合わせてボールを回していくといった拍を感じる活動を行った。そしてスカーフを配り、グリッサンドが聞こえたら空中にスカーフを放り投げたり、スカーフを花に見立てて「お花が笑った」に合わせてスカーフを動かしたり、蝶々の羽根に見立てて飛び回ったりという活動を行った。

その後一度子どもたちを落ち着かせるために、「はらぺこあおむし」の大型絵本を見せながら、歌い聞かせを行った。わらべうた遊びは保護者がよく知っているであろう「げんこつやまのたぬきさん」を行った後、子どもたちを膝に乗せてもらい「あんたがたどこさ」の「さ」で子どもを持ち上げたり、「さ」の部分だけ子どもの口を押さえて全員で歌わないようにしたり、テンポを速くしたりと一つの曲で様々な遊び方を行った。また「おはぎがおよめに行くときは」という保護者が子どもの頭や頬を撫でながら遊ぶわらべうた遊びや、「くまさんくまさん」という向き合って一緒に片足上げたり飛び跳ねたりするわらべうた遊びを行った。

歌唱活動は夏であれば「うみ」や冬であれば「あわてんぼうのサンタクロース」など季節の歌や、「アンパンマン

マーチ」「にじのむこうに」などの子どもがよく知っている曲を歌った。

最後に、タンブリン、鈴、カスタネット、卵形のマラカスのいずれかを子どもたちに持ってもらい、リズム練習を行った。例えばタンブリンの子どもたちには「タン・ウン・ウン」、その他の楽器の子どもたちには「ウン・タン・タン」を練習してもらい、歌唱活動で歌った「うみ」に合わせて合奏をしたり、「勇気100%」に合わせて「タン・ウン・タン・ウン・タン・タン・タン・ウン」というリズムを繰り返して叩いてもらったりと、曲に合ったリズムを提示し、ボランティアの学生たちが前で叩いているのを見ながら真似をするという活動を行った。

リトミックやわらべうた遊びは親子の肌が触れ合う内容を盛り込み、歌唱活動では保護者も一緒に歌えるように歌詞カードを配布し、打楽器遊びでは少し難しいリズムを取り入れつつも必ず見本となる学生を配置するように工夫して内容を考案した。

これらの活動を体験した上で、リトミック活動、わらべうた遊び、歌唱活動、打楽器遊びのそれぞれについて、

1. とても楽しかった
2. まあまあ楽しかった
3. どちらともいえない
4. あまり楽しくなかった
5. 全く楽しくなかった

の5つの選択肢のいずれかに丸を付けてもらった。結果は図1のようになった。

まず“リトミック活動”についてである。「とても楽しかった」と答えた保護者が82名(84.5%)、「まあまあ楽しかった」と答えた保護者が14名(14.4%)、「どちらともいえない」と答えた保護者が1名(1.0%)であり、「あまり楽しくなかった」、「全く楽しくなかった」と答えた保護者は0名であった。以下3つの質問について、「あまり楽しくなかった」「全く楽しくなかった」と答えた保護者は全て0名だったため、今後記載を省略する。

“わらべうた遊び”は「とても楽しかった」が73名(75.3%)、「まあまあ楽しかった」が23名(23.7%)、「どちらともいえない」が1名(1.0%)であった。

“歌唱活動”は「とても楽しかった」が79名(81.4%)、「まあまあ楽しかった」が17名(17.5%)、「どちらともいえない」が1名(1.0%)であった。

“打楽器遊び”は「とても楽しかった」が80名(82.5%)、「まあまあ楽しかった」が17名(17.5%)で、「どちらともいえない」は0名であった。

全体的に見ると、各項目全てで「とても楽しかった」「まあまあ楽しかった」を合わせると99%以上を占めていることは喜ばしいことであった。満足度が高い順に並べると、“リトミック活動”“打楽器遊び”“歌唱活動”“わらべうた遊び”となった。平成27年度に行った研究では、鹿児島市の子育て支援施設で行われている子育て支援講座の内容について調査した。その際、音楽遊びは数多く行われており、その中ではわらべうた遊びが最も多く行われていた(丸田・中村、2015)。この結果を元に、鹿児島ではわらべうた遊びの需要が高いのではないかと考え、今年よりわらべうた遊びを子育て支援講座の中に取り入れるようにしたばかりであったが、予想したよりはわらべうた遊びはあまり満足度が高くなかった。今泉ら(2012)によると、楽器遊びやわらべうた遊び、身体表現遊び、音楽を付けた絵本の読み聞かせなど様々な音楽活動を行ったところ、家庭では出来ない遊びの体験や初めての体験、生の楽器の音に触れる経験ができる内容であるほど満足度が高くなるということだった。特に《楽器を使った遊び》の満足度が高く、また《身体を使った遊び》に意欲的に参加することを望む傾向があるようだ。中村の今回の調査結果もこれと同様な結果が得られたと言って良い。

中村が平成26年度に同じく子育て支援講座にて質問紙調査を行った際、子どもの参加年齢が0歳から14歳と幅広く、且つ参加者の年齢を当日まで知ることができなかった。そのため年齢に応じて上手く活動内容を設定できず、参加者全てが満足できるような内容にすることができなかったことが反省点であった(中村・丸田、2014)。今回は年齢の幅が小さく、第1回目と第2回目は2、3歳児が中心に、第3回目は3歳から5歳児が中心ということを事前に把握することができたことで内容設定時に年齢を考慮することができ、2年前より内容の改善に努めることができた。そのおかげか、今回は講座全体に対する感想が「とても楽しかった」が86名(67.7%)、「まあまあ楽しかった」が39名(30.7%)、「あまり楽しくなかった」が2名(1.6%)となっており、満足度が低かったことと比べて、今年度は全般的に結果の数値が上昇していることがわかる。

(2) 音楽遊びとして希望する内容について

次に、今後音楽遊び講座を受講する場合、希望する内容について質問した。前述の4種類の活動に加えて、生演奏鑑賞、手作り楽器製作、手遊び・指遊びについても尋ねた。

1. 希望する
2. どちらかという他希望する

3. どちらともいえない
4. どちらかという并希望しない
5. 希望しない

の5つの選択肢のいずれかに丸を付けてもらった。すべての回答において、「どちらかという并希望しない」「希望しない」は0名だったため、その結果は省略している。

まず“リトミック活動”についてである。「希望する」が82名(84.5%)、「どちらかという并希望する」が8名(8.2%)、「どちらともいえない」が7名(7.2%)となった。リトミック活動が「とても楽しかった」と答えた82名のうち、76名(92.7%)が今後もリトミックを「希望する」と答えたが、一方で「どちらとも言えない」と答えた保護者が2名(2.4%)いた(表2)。満足度が高くてもまた体験したいと思えるかどうかは別ようである。

“わらべうた遊び”は「希望する」が72名(74.2%)、「どちらかという并希望する」が20名(20.6%)、「どちらともいえない」が5名(5.2%)となった。わらべうた遊びが「とても楽しかった」と答えた73名のうち63名(86.3%)が「希望する」と答えたが、1名が「どちらともいえない」と答えた(表3)。

“歌唱活動”は「希望する」が77名(79.4%)、「どちらかという并希望する」が18名(18.6%)、「どちらともいえない」が2名(2.1%)であった。歌唱活動が「とても楽しかった」と答えた79名のうち69名(87.3%)が「希望する」と答えていた(表4)。

“打楽器遊び”は「希望する」が89名(91.8%)、「どちらかという并希望する」が7名(7.2%)、「どちらともいえない」が1名(1.0%)であった。打楽器遊びに関しては「とても楽しかった」と答えた80名のうち78名(97.5%)が「希望する」と答えており、他の項目と比べても満足度の高さが伺える(表5)。

今回の講座において、リトミックを中心として活動し、打楽器遊びは最後の5分程度で歌いながら楽器を自由に叩いたり、簡単なリズムを真似して叩いてもらったりして盛り上がり上がって終わるという位置づけであった。それにも関わらず、「とても楽しかった」と答えた割合も4つの活動の中では高く、「今後も希望する」と答えた割合も最も高かったことは見逃せない。今後リトミックと並びメインの活動として取り入れていくことも検討したい。また、現在は楽器としてタンブリン、カスタネット、鈴、卵形のマラカスのみを現在用いているが、今後参加者の年齢に応じて、ハンドベルやトーンチャイム、木琴、鉄琴など音程のある楽器も使用していくように検討予定である。

ここからの結果は表6にまとめている。“生演奏鑑賞”は「希望する」が81名(83.5%)、「どちらかという并希望する」が9名(9.3%)、「どちらともいえない」が7名(7.2%)であった。“手作り楽器製作”は「希望する」が71名(73.2%)、「どちらかという并希望する」が24名(24.7%)、「どちらともいえない」が2名(2.1%)であった。“手遊び・指遊び”は「希望する」が89名(91.8%)、「どちらかという并希望する」が6名(6.2%)、「どちらともいえない」が2名(2.1%)であった。

7種類の音楽活動の中で需要の高かった順番に並べると1位が「打楽器遊び」及び「手遊び・指遊び」、3位が「生演奏鑑賞」、4位が「リトミック」、5位が「歌唱活動」、6位が「わらべうた遊び」、7位が「手作り楽器製作」となった。平成26年度に調査を行ったときは、子育て支援でどのような活動をしてほしいか尋ね、その選択肢として、「子どものための歌をたくさん知りたい」「子どもと一緒に歌を歌う機会がほしい」「リトミックのような身体活動を通した音楽遊びがほしい」「生演奏を聴かせる機会がほしい」の4つを挙げた。この質問は複数選択可である。このときの回答者127名の結果は、「リトミックのような身体活動を通した音楽遊びがほしい」が95名(74.8%)と最も高く、次いで「生演奏を聴かせる機会がほしい」が66名(52.0%)、「子どもと一緒に歌う機会がほしい」が40名(31.5%)、「子どものための歌をたくさん知りたい」が37名(29.1%)であった。今回の調査と完全に比較できるものではないが、前回はリトミックが最も高かったのに対し、今回はリトミックよりも生演奏鑑賞が上回っていたことが特徴的である。2年前の調査時の子育て支援講座では、中村がフルートを演奏する時間を5分から10分程度入れていた。今年はわらべうた遊びや打楽器遊びを多めに入れたかったために、演奏を入れなかった。今後の音楽遊びのプログラムを考案する際は、打楽器遊び、生演奏、リトミックを中心に計画を立てるようにしていきたい。

(3) 音楽を通した子育て支援講座に希望する内容について

塩崎(2008)が子育て支援講座に関する報告をまとめ分類したところ、子育て支援講座の目的は①具体的な育児の方法や技術を伝えるもの、②母親自身の成長や自信回復の支援、③親同士の交流の場となることの3つとなった。塩崎は「親が子育てを通して、親である自分を肯定的に受け止められるようになり、子どもとの関わりが喜びと感じられ、積極的に子育てに向かえるようになることが今日の子育て支援講座には求められているのである。」⁴⁾と述べてい

る。

中村が行っている音楽を通した子育て支援講座はどのような目的を持って行うべきなのかを考える上で、前述の3つの目的について考えてみた。まず音楽活動を行うことでは具体的な育児について伝えることはできない。そして母親の成長に携わることもできない。しかし、③の親同士の交流の場となることはできる。また、「子どものとの関わりが喜びと感じられ」ようにするため、親子で触れ合うことができる活動を多く取り入れ、自宅でも触れ合い遊びができるような子育て支援講座を行うことはできる。そこで、中村が目指す講座の目的と参加する保護者が希望する内容が一致しているかどうか調査することにし、音楽を通した子育て支援講座に“親子で触れ合う”“参加者同士でコミュニケーションを取る”といったことを求めるかどうか尋ねた。

まず、“親子で触れ合う”を「希望する」と答えたのは92名(94.8%)、「どちらかという并希望する」が5名(5.2%)であり、「どちらともいえない」「あまり希望しない」「希望しない」はいなかった。

一方、“参加者同士でコミュニケーションを取る”を「希望する」と答えたのは50名(51.5%)にとどまり、「どちらかという并希望する」が32名(33.0%)、「どちらともいえない」が11名(11.3%)、「どちらかという并希望しない」が4名(4.1%)となった。

親子で触れ合うことを希望しない保護者はいない。これは予想通りの結果である。しかし、参加者同士でコミュニケーションを取ることをどちらかという并希望しない保護者が少なからずいることがわかった。内閣府の子ども・子育て支援新制度「地域子育て支援拠点事業」の事業内容に「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進」とある。また、様々な子育て支援に関する報告の中に親同士の交流の場を設けることの意義について示してある。今年度の講座では、基本的に親子で向かい合っできる活動を行ったのだが、一つだけ親子5組ほどで円を作り、拍にあわせてボールを受け渡していくという活動で、グループで息を合わせて協力することが求められる内容を行った。それにより、講座終了後にも親同士で会話をするきっかけになればと考えたことであったが、筆者の講座に関してはあまりそれは望まれていないことがわかった。ただ親子で音楽を楽しみたいという目的で来られている人も多いようなので、今後はより親子の触れ合いに重点を置いた音楽遊びを多く取り入れられるように改善したい。そして子どもが楽しむことももちろんであるが、保護者自身が楽しんで積極的に講座に参

加し、家庭に持ち帰って子どもと触れ合うきっかけを作れるような講座内容にしたい。

4. まとめ

講座の内容が毎回同じような構成になってしまいがちであることが悩みの一つであった。また、楽しかったという気持ちで帰って頂けるに越したことはないが、子育て支援講座という名前が付いているため、保護者が求めていることに一致した内容ができていないのかについて自信がなかった。

今回の調査を通して、自宅でもできるような歌唱活動やわらべうた遊びよりも、周りを気にせず音を出せたり動くことができたりする活動的な遊びが求められていることがわかった。また親子での触れ合い活動を強く望まれていることがわかった。今回保護者からの要望の多かった楽器遊びと生演奏鑑賞、リトミックを中心とした子育て支援講座を行うに当たって、大規模のことはできないが、親子の触れ合いを重視し、しかし大人数いなければ楽しめないような内容を取り入れることを重視して今後の子育て支援講座を行っていききたい。

音楽を通した子育て支援講座は、講師が複数なのか一人なのかによってもできる活動の内容が変わる。複数講師がいれば、アンサンブルを聴かせることもできるし、絵本に音楽を付けて読む人や演奏する人で分担することもできる。しかし中村の担当する講座は講師が一人のため、講座の内容が広がらないことは否めない。ただし、学生にボランティアやアルバイトで補助を頼むことが多い。一人の保護者に対し子どもが兄弟姉妹で参加すること少なく、二人組で活動するときに保護者の代わりに入ってもらうためである。保育を勉強中の学生たちが子どもと接する機会を持つ一場面となるため、毎回参加の学生には講座への導入の手遊びをしてもらうようにしている。前述したように、講座を担当する教員が複数いればもっと幅広い活動ができると感じることもある。そこで今後学生たちと共にパネルシアターやペープサートなどを使って子どもたちに歌を聴かせることができないかと考えている。現在の内容は子どもたちが動くことが多くうるさくなりがちであり、静かな環境を作ることも必要なことから、目で見ても耳で聴いても音楽を楽しむことができる、パネルシアターなどの児童文化財を使用した歌い聞かせを導入したいと考えている。そしてこの活動を学生主体で行ってもらい、学生たちの保育技術の向上のためのアクティブ・ラーニング活動となるように進めていきたい。

この活動を行うに当たっては、次の3つの過程が必要となる。まず幼児曲を選曲する。次にその曲を表現するために適している児童文化財を選択し、作品を製作する。最後にピアノや歌、演じ方を練習する。より良い物を作るためには、音楽が専門の中村だけでは力不足であることは明白である。そこで美術が専門の松下と保育が専門の丸田と共にこの活動に取り組み、製作に関する指導は松下が、演じ方に関する指導は丸田が、選曲や演奏の仕方については中村がそれぞれ指導することにした。この保育実践が完成した後には、中村の子育て支援講座だけでなく、丸田の子育て

支援講座や、イベント、保育所・幼稚園などで学生たちが演じる機会を設け、保護者などにアンケートを取りながら改善を加えていく。平成29年度にはこの活動が実現できるようにするため、平成28年度は準備を行っているところである。この過程を今後の研究課題とし、学生たちがアクティブ・ラーニングとして取り組むために教員側がどのようにアプローチを行うのか、またアクティブ・ラーニングを行った結果学生たちがどのように成長したのかなどを継続的に見ていきたい。

表1 講座参加子どもの年齢別分布

1歳	6名	5.7%
2歳	56名	53.3%
3歳	27名	25.7%
4歳	6名	5.7%
5歳	8名	7.6%
6歳	2名	1.9%
計	102名	100.0%

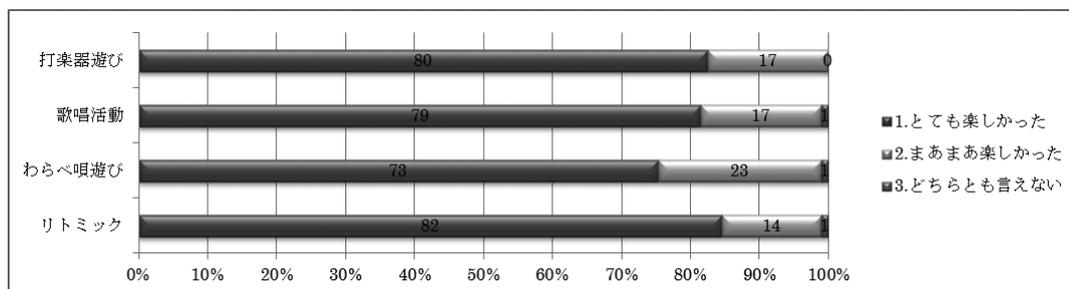


図1 活動内容の満足度

表2 リトミックの満足度と今後の子育て講座の内容への希望度

リトミック活動	とても楽しかった	まあまあ楽しかった	どちらとも言えない	合計
希望する	76名	6名	0名	82名
どちらかという希望する	4名	4名	0名	8名
どちらとも言えない	2名	4名	1名	7名
合計	82名	14名	1名	97名

表3 わらべうた遊びの満足度と今後の子育て講座の内容への希望度

わらべうた遊び	とても楽しかった	まあまあ楽しかった	どちらとも言えない	合計
希望する	63名	9名	0名	72名
どちらかという希望する	9名	11名	0名	20名
どちらとも言えない	1名	3名	1名	5名
合計	73名	23名	1名	97名

表4 歌唱活動の満足度と今後の子育て講座の内容への希望度

歌唱活動	とても楽しかった	まあまあ楽しかった	どちらとも言えない	合計
希望する	69名	8名	0名	77名
どちらかという并希望する	10名	7名	1名	18名
どちらとも言えない	0名	2名	0名	2名
合計	79名	17名	1名	97名

表5 打楽器遊びの満足度と今後の子育て講座の内容への希望度

楽器遊び	とても楽しかった	まあまあ楽しかった	どちらとも言えない	合計
希望する	78名	11名	0名	89名
どちらかという并希望する	2名	5名	0名	7名
どちらとも言えない	0名	1名	0名	1名
合計	80名	17名	0名	97名

表6 活動ごとの今後の子育て講座の内容への希望度

	生演奏鑑賞	手作り楽器製作	手遊び・指遊び
希望する	81名 (83.5%)	71名 (73.2%)	89名 (91.8%)
どちらかという并希望する	9名 (9.3%)	24名 (24.7%)	6名 (6.2%)
どちらとも言えない	7名 (7.2%)	2名 (2.1%)	2名 (2.1%)
合計	97名	97名	97名



写真1 わらべうた遊びの様子



写真2 リトミック活動の様子

引用文献

- 1) 梅本堯夫 (1999) 「子どもと音楽」 東京大学出版会
- 2) 石川眞佐江, 大沼覚子 (2009) 「乳幼児期における表現の育ちを支える音楽教育—保育及び子育て支援における試みの検討—」 日本音楽教育学会編『音楽教育学の未来』音楽の友社, pp.177
- 3) 志村洋子 (1996) 「母と子の初めての音楽体験／『子どもは天才!』音楽のある育て方」音楽之友社, pp.68
- 4) 塩崎尚美 (2008) 「子育て講座の意義の検討—子どもに対する視点の変化に注目して—」 日本女子大学紀要, 人間社会学部19, pp.70

39

- ・ 秋崎剛 (2015) 「音楽の活用を中心とした子育て支援プログラムの開発に関する研究—プログラム内容の構成要素に着目して—」 幼年児童教育研究第27号 pp.35-48
- ・ 蒲原基道他 (2006) 「幼稚園・保育所・認定こども園から広げる子育て支援ネットワーク」 東洋館出版社
- ・ 子育て支援プロジェクト研究会 (2013) 「子育て支援の理論と実践」 ミネルヴァ書房

(平成29年1月18日 受理)

参考文献

- ・ ロザムンド・シューター (1977) 「音楽才能の心理学」 音楽之友社
- ・ D.J. ハーグリーブス著, 小林芳郎訳 (1993) 「音楽の発達心理学」 田研出版株式会社
- ・ 今村明美他 (2012) 「子育て支援における音楽表現遊びの実践についての一考察—地域子育て支援の現状と課題の分析—」 小田原女子短期大学研究紀要第42号 pp.8-20
- ・ 中村礼香・丸田愛子 (2015) 「鹿児島県における音楽を通じた子育て支援からみえる課題」 鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究所所報第31号 pp.23-32
- ・ 丸田愛子・中村礼香 (2016) 「鹿児島県における触れ合い遊びを通じた子育て支援から見える課題」 鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究所所報第32号 pp.51-57
- ・ 鷹羽綾子 (2014) 「音楽的表現を楽しむ子育て支援活動の取り組み—『子どものための音楽ひろば』の実践報告—」 名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要第7号 pp.67-73
- ・ 鷹羽綾子 (2015) 「音楽的表現を楽しむ子育て支援活動の取り組み (2) —『子どものための音楽ひろば』の実践報告—名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要第8号 pp.29-